

社会人基礎力の向上に着目した PBL 型ゼミ教育の実践と効果

近 澤 潤

星槎道都大学研究紀要

経営学部

第 3 号

2022 年

社会人基礎力の向上に着目した PBL 型ゼミ教育の実践と効果

近 澤 潤

要約

本研究は、PBL (Project-based Learning: プロジェクト型学習) 型ゼミ教育を実践し、「社会人基礎力」と「プロジェクトの成功要因」の2つの指標を用いて調査・測定を行い、授業改善に結びつけることを目的として実施した。PBL は、プロジェクトの実践過程を経て具体的目標を追求しながら行う教育法である。「何を教えるか」ではなく、「どのように教えるのか」に焦点を当て、学習者の能動的な体験を通して、自身や他者、課題に対して得た様々な気づきから自己成長のサイクルを創造することを重視している。そこで、星槎道都大学で開講する「基礎ゼミナール I A・I B・II A・II B」を対象として、PBL 型ゼミ教育を実践したところ、学習者は社会人基礎力の向上を実感できたとし、PBL の成功要因 (プロジェクトへの満足度) においても高い満足度を示した。この結果から、今回の PBL 型ゼミ教育においては一定の教育効果を得られたことが確認された。

1. はじめに

昨今の大学教育においては、知識の伝達という以上に、学生の能力を高める教育であることが重視されている (坪井 2015)。その教育手法として、注目されてきたのがアクティブラーニングである。アクティブラーニング (active learning) とは、アメリカの大学の大学の大衆化や混乱を背景に Bonwell & Eison (1991) によって概念化された学習理論である。アクティブラーニングは、「能動的な学習」を指し、授業者が一方向的に知識伝達を行う講義スタイルではなく、学習者を中心とした知識を自ら構成するスタイルで進められる (溝上 2007)。日本においても、中央教育審議会 (2012) により、これからの時代には生涯学び続ける力と主体的に考える力を持った人材が必要であり、この人材を育成するためには旧来型の受動的な教育ではなく、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく「能動的な学習」に転換しなければならないと示され、あらゆる分野においてアクティブラーニングに関する研究や実践報告がなされてきた。

一方で、大学教育において習得させるべき能力を明確にする動きがあった。経済産業省 (2006) は「社会人基礎力」という「職場や地域社会の中で多くの人々と接触しながら仕事をしていくための能力」を提唱し、大学教育にその育成を求めた。社会人基礎力などの資質・能力は、講義型授業のみでは開発が困難な能力であり、アクティブラーニングを通じて育成されることが期待されている (溝上 2014) ため、各分野において研究や実践報告がなされてきた。

以上の背景から、アクティブラーニングは、大学教育

の学習成果として、知識・技能の獲得だけでなく、社会人基礎力などの概念において提唱されている資質・能力の獲得が、社会から要請されるようになり (小山・溝上 2017)、大学教育におけるアクティブラーニング導入時の教育効果に関する研究や実践報告の蓄積が求められている。

2. 先行研究

2-1. アクティブラーニング

アクティブラーニングの起源について山内 (2019) は、近代型の学校制度の整備や、体系的なカリキュラムと教員が児童・生徒に説明する授業形式の普及に対応して、学習者がより動的に関与する学習スタイルの必要性が主張されはじめたことから、近代型の学校が生み出した「講義型授業」という教育方法に対して、学習者がより能動的に関与できる教育方法を模索する実践運動の標語であったと推測している。つまり、「何を教えるか」ではなく「どのように教えるか」という視点で議論が展開され、後者が重要であるということが強調され始めたのである (Cross 1987)。

そして、様々な研究者によってアクティブラーニングの定義づけが行われている。Bonwell & Eison (1991) は、学習内容や教室においてアクティブラーニングを促進するための方略に見られる共通点を整理した上で、「学生が行動することや、行動の内容について考える活動に従事させるもの」と定義した。Prince (2004) は「アクティブラーニングは、一般的に学生を学習過程に従事させる全ての教育方法である。要するに、アクティブラー

ニングは学生が有意義な学習活動に参加し、彼らがしていることについて考えることを求める。」とした。Felder & Brent (2009) は、「単に聴いたり見たりノートをとる以上の全ての授業内の学生の学習行為」と広く定義した。これらの定義に共通して言えることは、一方的に知識を伝達するのではなく、学習の過程において学習者の積極的な関与が必要不可欠であるという点である。日本においては、溝上 (2014) が、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという (受動的) 学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」と定義した。これまでの定義に「認知プロセスの外化」を加えたのは、複雑なアウトプットを体系的に情報処理し、再度消化=認知するプロセスの重要性を強調したからである (本庄 2017)。

以上のように、アクティブラーニングは広範な意味を持つ用語である。溝上 (2014) は、「アクティブラーニングは、厳密に言うと学生の学習 (learning) の一形態を表す概念であって、教員の教授 (teaching) や授業・コースデザイン (instructional/course design) まで包括的に表す教授学習 (teaching and learning) の概念ではない」と指摘した上で、その教授学習の概念として「アク

ティブラーニング型授業 (active-learning-based instructional)」と呼び、学習概念としてのアクティブラーニングと区別している。

アクティブラーニング型授業の技法・戦略には様々あり、溝上 (2014) は図表1の通りまとめている。

中でも PBL (Problem-based Learning/Project-based Learning) は、学生主導型において代表的な戦略の1つであり、大学教育への導入も活発である。次項にて、PBL の概要・先行研究についてレビューする。

2-2. PBL

PBL は、Problem-based Learning (問題基盤型学習) 及び Project-based Learning (プロジェクト型学習) の略として扱われ、ときにそれらを区別せず同一のように扱われることもある (前田・小森・宮脇 2016)。

問題基盤型学習は、医学教育から生まれた学習デザインであり、1960年代後半にカナダの大学とアメリカの大学において、問題解決スキルの獲得と、実際の医療の場面を想定することで研修医の診断スキルの獲得を目指すために行われた学習法である (Albanese & Mitchel 1993)。その後、多くの医学部をもつ大学や専門学校に導入され、現在では初等、中等教育にも広がり、学習対象の領域もビジネス、法律、工学等に拡大している (湯

図表1 アクティブラーニング型授業の技法と戦略

タイプ	タイプ1	タイプ2	タイプ3
主導形態	教員主導・講義中心型	教員主導・講義中心型	学生主導型
伝統的講義に対するアクティブラーニング型授業としての戦略性	低	中～高	高
技法・戦略	<ul style="list-style-type: none"> ・コメントシート／ミニッツペーパー (大福帳／何でも帳など) ・小レポート／小テスト ・宿題 (予習／演習問題／e-Learning など) ・クリッカー ・授業通信 	<ul style="list-style-type: none"> ・デイスカッション ・プレゼンテーション ・体験学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・協同・協調学習 ・調べ学習 ・ディベート ・LTD 話し合い学習法 (Learning Through Discussion) ・ピアインストラクション (Peer Instruction) ・PBL (Problem-Based Learning) ・PBL (Project-Based Learning) ・チーム基盤学習 (TBL: Team-Based Learning) ・IBL (Inquiry-Based Learning) ・ソクラテスマソッド ・ケースメソッド (Case-Based Teaching/Instruction) ・発見学習 (Discovery Learning) ・ピアラーニング (Peer Learning) ・FBL (Field-Based Learning) ・加速度学習 (Accelerated Learning) ・BLP (Business Leadership Program)

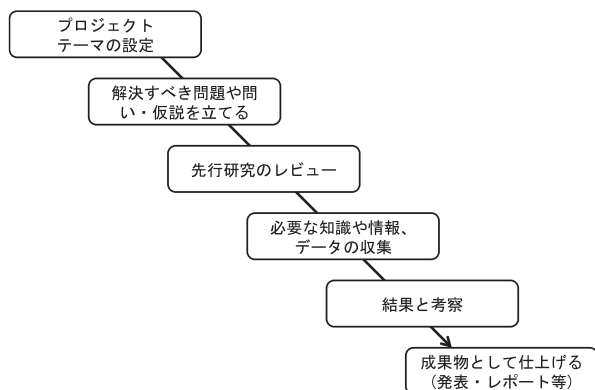
出所：溝上 (2014) より一部抜粋して筆者作成

浅・大島・大島 2011)。問題基盤型学習は、問題が学生に提示され、グループで相互に知識を獲得しながら問題解決に向けて取り組ませる、言わばそれは系統的教育を否定し、「問題」が「学び」を引き出すという観点に立った教育法である(榎本・織田・児島 2009)。この教育法により、拡張可能で柔軟な知識の獲得、問題解決方略の獲得、自己主導型学習の促進、協調の方略の獲得、内発的動機の促進が示されている(Barrows & Kelson 1995)。

一方、プロジェクト型学習の起源について、湯浅ら(2011)は、問題基盤型学習やプロジェクトメソッドとする捉え方が一般的であり、実践的なプロジェクト活動の学習効果が広く認知されていたことから、プロジェクトを用いた学習が恒常的に行われてきたとしている。

プロジェクト型学習の定義については様々提唱されているが(Bell 2010; Thomas 2000)、これらを参考に溝上(2016)は、「プロジェクト型学習とは、実世界に関する解決すべき複雑な問題や問い、仮説を、プロジェクトとして解決・検証していく学習のことである。学生の自己主導型の学習デザイン、教師のファシリテーションのもと、問題や問い、仮説などの立て方、問題解決に関する思考力や協働学習等の能力や態度を身につける。」と包括的に定義しており、本研究においてはこの定義を採用して進めることとする。

プロジェクト型学習は、図表2に示すステップで進められる(溝上 2016)。プロジェクトテーマを設定し、解決すべき問題や問いを考え、先行研究・先行事例をレビューし、問題解決に必要な知識や情報を集め、調査や実験等によってデータを収集し、分析結果を踏まえて考察を行い、成果物(ポスター・レポート等)をアウトプットするのである。



図表2 プロジェクト学習のステップ
出所：溝上(2016)

このように、プロジェクト型学習は、プロジェクトの実践過程を経て具体的な目標を追求しながら行う教育法であり、その体験を通して、自身や他者、課題に対して得

た様々な気づきから自己成長のサイクルを創造することを重視している(榎本ら 2009)。

どちらのPBLも大きな違いはないが、専門分野や教育目的によってどちらのPBLを導入するかを検討する必要がある。本研究では、具体的な目標に向けてビジネスの現場をイメージした内容・手順を進めるため、後者のプロジェクト型学習を行うものとし、以降の表記をPBLとする。

PBLの効果に関しては、様々な研究報告がなされている。Garnjost & Lawter (2019)は、PBLを含めた4種の学習者の積極的関与を求める教授法と、講義等による知識の伝達を中心とする教授法について、学習成果と学習者の満足度を比較した結果、PBLは講義と比較して、より多くの知識を獲得でき、問題解決スキルが向上し、高い学習満足度を得られ、高い有意な成果をもたらすことを報告している。

山岡(2014)は、企業との連携によるプロジェクト型学習を行ったところ、企業との共同作業という新たな経験を積むことで自信を獲得することができ、地域やまちづくり、協力企業への関心が高まったことから、地域社会という外の世界への関心が高まったことを報告している。この自信の獲得という点において、Clausen & Andersson (2019)もPBLの経験は、モチベーションの向上や自信獲得が期待できることを明らかにしている。

このようにPBLは、知識やスキルに留まらず、学生の気づきや姿勢の形成、モチベーションの向上を促すことができ、湯浅ら(2011)は学習効果として、出席数の増加、自立心の成長、学習態度の改善や高度な思考力、問題解決能力、共同作業、コミュニケーションなどの複雑なスキルを伸ばせる可能性を示唆している。特に外部機関(民間企業など)との連携によるPBLを行うと、外部者からのフィードバックを得ることができるため、Seow, Pan, & Koh (2019)は、外部者との協働が、専門知識の適用力や、複雑かつ多面的環境への対処力、批判的思考、問題解決、コミュニケーションといった能力の向上に期待できるとしている。

2-3. 社会人基礎力

経済産業省(2006)は、「多様な人々との協働」のために必要な「職場等で求められる能力」をより明確にし、意識的な育成や評価を可能とすることが必要だとした上で、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を「社会人基礎力」と名付けた。そして、この社会人基礎力は、①前に踏み出す力(主体性、働きかけ力、実行力)、②考え抜く力(課題発見力、計画力、創造力)、③チームで働く力(発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力)

の3能力, 12能力要素で構成されるとしている。その後, 経済産業省(2018)により, 社会人基礎力の重要性や有効性は十分であると評価した一方で, 「人生100年時代」の切り口・視点が必要だとして, 「人生100年時代の社会人基礎力」と再定義した。これまでの社会人基礎力は, 教育と社会のつながりに重点を置き, 社会人になるために習得することが望ましい能力・能力要素を提示していたが, 「人生100年時代の社会人基礎力」は, 就学前教育から中高年社会人に至る長い期間における, それぞれのライフステージについて「何を学ぶか(学び)」「どのように学ぶか(統合)」「どう活躍するか(目的)」を設定した。このような経緯から, 社会人基礎力は教育の現場でより注目されるようになり, 社会に近い大学教育を中心に, 社会人基礎力の育成に関する研究報告がなされるようになった。

尾崎・広瀬・市川・山本(2018)は, 社会人基礎力の修得を目的としたPBL授業について, 成功要因と学習成果を可視化し, 継続的改善の方法を提案・考察した後, 翌年にその方法で授業改善を行い, 学習成果を比較した結果, 提案した継続的改善の方法は有効であったと報告している。

吉田(2008)は, 社会人基礎力の養成を目的としたグループ活動が中心の科目を実施し, 学習終了後に履修生に対してアンケート調査を行ったところ, ほとんどの履修生が社会人基礎力の自己成長を実感していることを報告している。併せて, 授業内ではSNSを活用した授業を展開し, SNSを積極的に活用したグループほどその自己成長を実感していることを明らかにしており, グループ活動におけるSNSの活用は, 情報共有により共通認識ができ, 思いついたときに意見を投稿できることで活動意欲が高まったのではないかと推測している。

西道(2011)は, 大学生及び一般社会人向けの40項目からなる社会人基礎力測定尺度を開発し, 個人単位で社会人基礎力に相当する力を測定するための尺度として用いることが可能であるとしている。

3. 研究目的

以上のように概観してきた先行研究から, 様々な視点でPBLの教育効果の測定・考察が行われており, 測定指標として社会人基礎力が多く用いられることがわかった。そこで, 本研究ではPBL型ゼミ教育を実践し, その教育効果を社会人基礎力の指標を用いて定量的に測定を試み, PBL型ゼミ教育の有用性について考察・検討を行い, アクティブラーニング・PBL研究の1事例として蓄積することを目的とする。併せて, 尾崎ら(2018)に倣い, 成功要因を調査により明確化することで, 今後の授業改善に結びつけるものとする。

4. PBL型ゼミ教育の概要

本研究の研究対象として, 筆者が担当する星槎道都大学(北海道北広島市)の共通教育科目「基礎ゼミナールI A・B / II A・B」(2020~2021年度)を取り上げる。本科目(ゼミ)は, グループワークを基本とした様々な演習課題や事例研究, 学内外のプロジェクト活動を通して, 社会人基礎力の育成を目的としている。

PBLのテーマを, 「星槎道都大学附属図書館利用促進リニューアルプロジェクト」と題して, 利用促進を図るためのリニューアルを提案・実行することを目的とし, 13名のゼミ学生を2グループに分けて, 現状分析, 企画考案, 提案資料作成, 提案・予算折衝, 施工, 評価を約1年半かけて実施した。実際の社会における流れを想定して, 現状分析の際はSWOT分析等の経営学的分析手法を用いて取り組み, 企画考案は図書館の強みを活かし, 弱みを改善する企画を中心に立案, 提案は図書館に対してスライド資料を用いて発表, 承認を得た企画に沿ってレイアウト変更や物品購入・配置, ルール作り等を行いリニューアルオープンし, 企画内容の評価を行うため, 全学生に対して質問紙調査を行い評価した。

なお, 指導者はゼミ担当教員1名であり, その他図書館の館長・副館長・センター長・職員の計4名の外部協力を得て実施している。

5. 調査

5-1. 概要・方法

調査は, 学習成果(社会人基礎力)と成功要因について定量的に分析するため, ゼミ学生13名を対象に, 自己評価活動の一環として, 授業時間内に質問紙調査(インターネット調査)を実施し, 有効回答数は10件であった。なお, 「教員に良く思われたい」「ネガティブに回答したら怒られそう」といった社会的な望ましさによるバイアスを考慮して, 調査結果は集団データとして処理され, 学習成績には一切影響ないことを説明し, 質問紙への回答を持って承諾したものとして扱うことを事前に説明した。

学習成果を測定する尺度として, 尾崎ら(2018)及び西道(2011)を参考に, 本研究の研究対象であるPBL型ゼミ教育の表記に一部修正して, 25項目の質問を作成した。回答は, 今回のPBLを行った結果, 自分自身の姿勢や能力が高まったかについて, 5件法(5:大変高まった~1:全く高まらなかった)により求めるよう作成した。

成功要因に関する尺度は, 尾崎ら(2018)を参考に, 本

研究の研究対象である PBL 型ゼミ教育の表記に一部修正して、学生の活動に関する質問 7 項目、教員の関わりに関する質問 4 項目、外部協力者に関する質問 2 項目、資産の活用に関する質問 5 項目、授業設計に関する質問 3 項目の合計 21 項目の質問を作成した。回答は、今回の PBL を行った結果、何が成功要因であったかについて、5 件法（5：とても当てはまる～1：全く当てはまらない）により求めるよう作成した。なお、成功要因の構造については図表 3 を参照のこと。

5-2. 結果

学習成果（社会人基礎力）の修得度に関する結果を図表 4 に示す。ゼミ学生は、学習成果について、受講前と比較して全体的に向上したと感じており、特に主体性は、より大きく向上したことがわかる。主体性は「物事に進んで取り組む力」であり、プロジェクト型学習及びアクティブラーニングの根幹的な能力であると言えるが、ゼミ学生はプロジェクトのテーマに対する基礎知識と専門知識を得ようとする姿勢が強まり、プロジェクトを最後までやり遂げる責任感が高まったことが明らかとなった。

次いで、働きかけ力・状況把握力・ストレスコントロール力が、大きく向上した。働きかけ力は「他人に働きかけ巻き込む力」であり、グループ活動を率先して実行するために欠かせない能力であるが、プロジェクトの進行において、周囲の人たちに正当性を示しながら提案する姿勢が強まり、「誰に何を伝えるか」を意識して、プレゼンテーションや資料を作成する能力が向上したことが明らかとなった。柔軟性は、「意見の違いや立場の違いを理解する力」であり、メンバーとの円滑なコミュニケーションを図る上で重要な能力であるが、自分と異なる意見に対しても耳を傾け、何かを得ようと柔軟に対応する姿勢が強まり、その意見がたとえ自分に対する批評・批判であっても、助言・指導として柔軟に受け止めること

ができるようになったことが明らかとなった。ストレスコントロール力は、「ストレスの発生源に対応する力」であり、自身への精神的・肉体的負荷が高まった際に、感情をコントロールして冷静な対応をするときに必要な能力であるが、自分の感情や意見を当事者や相談できる人に適切に伝えられる姿勢が強まり、失敗や不満の事態を学習・成長・進歩の好機として捉えることができるようになったことが明らかとなった。

対して、最も大きな向上が見られなかったのは傾聴力であった。傾聴力は「相手の意見を丁寧に聴く力」であり、会話中に相手との共通部分を見出し、共感を持つ姿勢や、会話中に先の広がる質問（5W1H）を使って明確な情報を得る能力の向上が最も低い結果となった。

成功要因の充足度に関する結果を図表 5 に示す。この結果、ゼミ学生は今回の PBL 型ゼミ教育「図書情報館リニューアルプロジェクト」に関して成功要因は満たされていると感じていたことがわかった。特に、ファシリテーター等としての教員個人の関わり、外部協力者の授業への理解や協力関係は全く問題なかったという結果が得られた。個人に対する教員の関わりについては、学生の意見を取り入れ、適切な助言を与えることができ、責任ある態度で接することができていたとしており、教員のファシリテーターとしての役割は十分であったと思慮される。外部協力者については COVID-19 の感染拡大の影響で学外との連携が困難であったため、学内教職員が外部協力者となったことは考慮しなければならないが、PBL に対する理解は十分に得られたと推測される。

次いで、学内環境、資金に関する満足度が高い結果となった。学内環境については、学内でプロジェクトの活動をする際、ミーティングスペース等の作業スペースは整っていたことが明らかとなった。プロジェクトでは、図書情報館内の個室や、周辺にある教室、ゼミ室を作業スペースとして開放し、作業内容に応じて自身で選んで使用できたことが、高い満足度を得られたと考えられる。

図表 3 成功要因構造図

成功要因	要素	詳細
学生の活動	個人 グループ	専門知識、経験、モチベーション メンバー構成、役割
教員の関わり	個人 グループ	ファシリテーション能力 連携、情報共有
外部協力者の関わり	理解 コミュニケーション	授業への理解、協力 対学生、対教員
資源の活用	学内環境 学外環境 ICT 資金	ミーティングスペース 移動手段 情報共有、連絡手段 十分な資金
授業設計	選択基準	難易度、魅力、テーマ

出所：尾崎ら（2018）

図表4 学習成果の修得度

学習成果		平均	標準偏差
前に踏み出す力	主体性	4.05	0.86
	働きかけ力	3.90	0.83
	実行力	3.70	1.05
考え抜く力	課題発見力	3.70	0.95
	計画力	3.55	1.02
	創造力	3.85	0.96
チームで働く力	発信力	3.50	1.12
	傾聴力	3.45	0.92
	柔軟性	3.80	0.98
	状況把握力	3.90	0.94
	規律性	3.55	1.28
	ストレスコントロール力	3.90	1.04

図表5 成功要因の充足度

成功要因		平均	標準偏差
学生の活動	個人	3.67	1.27
	グループ	3.30	1.10
教員の関わり	個人	5.00	0.00
	グループ	4.20	0.87
外部協力者の関わり	理解	5.00	0.00
	コミュニケーション	3.90	1.04
資源の活用	学内環境	4.70	0.64
	学外環境	4.40	0.80
	ICT	4.10	1.09
	資金	4.60	0.80
授業設計	選択基準	3.93	1.06

資金については、プロジェクトに関する資金は使いやすく、十分であったことが明らかとなった。資金については、図書情報館職員とゼミ学生・指導教員とで話す場を多く持つことができたため、ある程度の資金確保が可能であったと考えられる。

対して、最も満足度が低かったのは、学生のグループにおける活動であった。具体的には、グループ内のメンバー同士でコミュニケーションを図ること、情報を共有すること、スケジュール管理を行うこと、グループ内で設定したルールを遵守することである。COVID-19 感染拡大の影響で、通常行っていた対面でのコミュニケーションが少なかったことが原因とも思慮されるが、この状況下でもさらに活発なコミュニケーションがとれるよう、工夫を講じる必要があることが示唆された。

6. 考察・まとめ

本研究における調査の結果、今回のPBL型ゼミ教育の授業目的である、社会人基礎力の育成について、一定の効果を得られたと考えられ、PBLの成功要因を十分に有し、期待されていた学習成果を得られたことが示さ

れた。ただし、授業改善に向けて、調査結果や今回のPBLの実施形態を鑑みて、次の点において改善が求められることが示唆された。

1点目は、今回のPBLはCOVID-19感染拡大の影響により、学内を活動範囲とするPBLであったため、外部協力者の協力が得られやすく、活動しやすかったことと思慮されるため、地域連携におけるPBLでは、本事例よりも学生の活動に対して注意して観察し、ファシリテーターとしての関与方法について検討が必要であること。

2点目は、社会人基礎力の主体性については十分向上できたとする結果が示されたが、学生のグループ活動に対する満足度との差が大きいことから、主体性が十分にグループ内に浸透していなかった可能性が考えられることである。従って、グループ内で主体性を持って活動できる雰囲気づくりや合意形成の方法について、ゼミ学生に対して学習する機会を設ける等、対策を講ずる必要があると思慮される。

3点目は、PBLは少人数での活動が条件となることがあるが、今回の調査における有効回答数は10件と少ないため、今後も継続して更なる研究・調査の蓄積が求

められることである。

PBL は、様々な知識やスキルの習得に留まらず、その実践までを必要とする学習法である。失敗を恐れずチャレンジする前向きな姿勢が求められ、その姿が周囲のゼミ学生に影響をもたらすことで、互いに教え合い、支え合う構造が形成される。本研究の結果をもとに、さらに有用な PBL カリキュラムを構築できるよう、今後も改善を繰り返しながら研究事例を積み上げていく。

参考文献

- Albanese, M. A., & Mitchel, S. (1993). Problem-Based learning: A review of literature on its outcomes and implementation issues. *Academic Medicine*, 68(1), 52-81.
- Barrows, H., & Kelson, A. C. (1995). *Problem Based Learning in Secondary Education and the Problem-Based Learning Institute*, Problem Based Learning Institute, Springfield, IL.
- Bell, S. (2010). Project-based learning for the 21st century: Skills for the future. *The Clearing House*, 83, 39-43.
- Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991). *Active Learning: Creating excitement in the classroom* (ASHEERIC Higher Education Rep. No.1). Washington, DC. The George Washington University. School of Education and Human Development.
- Clausen, H. B. & Andersson, V. (2019). Problem-based learning, education and employability: A case study with master's students from Aalborg University, Denmark. *Journal of Teaching in Travel & Tourism*, 19(2), 126-139.
- Cross, K. Patricia. (1987). *Teaching for Learning*. AAHE Bulletin, 39, 3-7.
- Felder, R. M. & Brent, R. (2009). Active learning: An introduction. *ASQ Higher Education Brief*, 2(4).
- Garnjost, P. & Lawter, L. (2019). Undergraduates' satisfaction and perceptions of learning outcomes across teacher-and learner-focused pedagogies. *International Journal of Management Education*, 17(2), 267-275.
- Kilpatrick, W. H. (1918). The Project Method. *Teachers College Record*, 19(4), 319-335.
- Prince, M. (2004). Does Active Learning Work? A Review of the Research, *Journal of Engineering Education*, 93(3), 223-231.
- Savery, J. R. (2006). Overview of problem-based learning: Definitions and distinctions. *Interdisciplinary Journal of Problem-Based Learning*, 1(1), 9-20.
- Seow, P. S., Pan, G., & Koh, G. (2019). Examining an experiential learning approach to prepare students for the volatile, uncertain, complex and ambiguous (VUCA) work environment. *International Journal of Management Education*, 17, 62-76.
- Thomas, J. W. (2000). *A review of research on project-based learning*, San Rafael, CA: Autodesk Foundation.
- 榎本達彦・織田勝也・児島秀樹 (2009) 「経営学科におけるプロジェクト体験学習 (PBL) 導入の試み—その成果と課題—」『明星大学経済学研究紀要』40(2), 49-63.
- 尾崎剛・広瀬啓雄・市川博・山本芳人 (2018) 「社会人基礎力の修得を目標とした課題実践型 PBL 授業の継続的改善策の提案」『日本教育工学会論文誌』42(3), 243-253.
- 経済産業省 (2006) 「社会人基礎力に関する研究会—中間取りまとめ—」 (https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf, 2022/1/10 閲覧).
- 経済産業省 (2018) 「我が国産業における人材力強化に向けた研究会 (人材力研究会) 報告書」 (https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf, 2022/1/10 閲覧).
- 小山理子・溝上慎一 (2017) 「講義型授業とアクティブラーニング型授業への取り組み方が学習成果に及ぼす影響—短期大学生の調査結果から—」『名古屋高等教育研究』17, 101-121.
- 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」 (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm, 2022/1/10 閲覧).
- 坪井明彦 (2015) 「ゼミ活動を通じた PBL 実践の効果と課題—学生の能力の伸長という点からの考察—」『地域政策研究 (高崎経済大学地域政策学会)』17(3), 45-57.
- 中西善信 (2020) 「プロジェクト学習ゼミの効果: 大学の学びをいかに社会で活かしているか」『経営と経済』99, (1, 2, 3, 4), 49-76.
- 西道実 (2011) 「社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み」『プール学院大学研究紀要』51, 217-228.
- 本庄加代子 (2017) 「PBL の課題克服に向けたプロジェ

- クトマネジメント理論の有効性—文系大学での学生の態度変容とその効果—」『東洋学園大学紀要』25, 145-164.
- 前田純弘・小森亜紀子・宮脇啓透 (2016) 「学士 (経営学) 課程教育における学習効果の測定—集団留学等が学生の能力に与える影響についての考察—」『昭和女子大学現代ビジネス研究所紀要』.
- 溝上慎一 (2007) 「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』7, 269-287.
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂.
- 溝上慎一 (2016) 『アクティブラーニングとしてのPBLの探求的な学習』東信堂.
- 山内祐平 (2019) 「教育工学とアクティブラーニング」『日本教育工学会論文誌』42(3), 191-200.
- 山岡義卓 (2014) 「企業との連携によるプロジェクト型授業の運営および大学生の学習効果について」『国際経営論集』47, 183-194.
- 湯浅且敏・大島純・大島律子 (2011) 「PBL デザインの特徴とその効果の検討」『静岡大学情報学研究』16, 15-22.
- 吉田咲子 (2008) 「社会人基礎力演習における学内 SNS の活用」『京都光華女子大学研究紀要』50, 139-152.

Practice and Effectiveness of PBL Seminar Education Focusing on the Improvement of Basic Social Skills

CHIKAZAWA Jun

Abstract

The purpose of this study is to implement project-based learning (PBL) seminar education and conduct surveys and measurements via the two indicators of “basic workforce skills” and “success factors of projects” to link them to classroom improvement. PBL is an educational method that pursues specific goals through the process of project implementation. It focuses on “how to teach” rather than “what to teach,” emphasizing the creation of a cycle of personal growth from the various insights gained about oneself, others, and issues through the active experience of learners. Therefore, after implementing PBL seminar education in “Basic Seminar IA・IB・IIA・IIB” offered at Seisa Dohto University, the learners felt that they were able to improve their basic workforce skills improving with high satisfaction shown in the success factors (project satisfaction) of PBL. From these results, it was confirmed that a certain degree of educational effect was obtained with PBL seminar education.

